

一、はじめに

今年度、武蔵野青年の家では「情報・資料サービスシステム」を計画しました。そのためには、資料の分類・提示・提供など技術的習得が必要になりました。

一方、区市の社会教育課や社会教育施設を私たちが訪問した際にも、氾濫する資料をいかに整理・提供すべきか、悩んでいることを聞きました。

そこで、それらの主に技術的習得のための講座を開き、青年の家ばかりでなく、希望者にも呼びかけて学習することにした。

しかし、講師と行らあわせを重ねるうちに、これは、ハウツーだけでは片づけられないことに気づき、主に「情報公開」等の大きな課題にアプローチしながら、現場のハウツーも学んでいくことにしました。

第一回は、情報提供の先進例、日野市市政図書館を訪れました。

二、日野市図書館の現状

日野市には、現在、中央図書館七つの分館、二台の移動図書館からなる図書館システムによって、

全蔵サービスネットを構成し、どの分館からでも、全蔵書に関するサービスの受けられるようになっています。

日本には、古くから図書館は建物でできてからという考えがありますが、図書館で重要な機能は、資料提供を行なうサービスシステムであり、極論すれば、リヤカーでひっぱっても図書館は成立するのです。

図書館の役割と

情報資料サービス

講座「情報整理の技術」

日野市では、「あそこに行けば情報・資料が得られる」という市民の信頼を、最も大切にしています。

三、市政図書館の役割

図書館の基本的機能として、貸し出しとレファレンスがあげられ、レファレンスの核は、地域資料や行政資料の提供にあります。

しかし、従来、行政資料は企画や総務の部門で扱われていました

が、より積極的な活用をはかるために、図書館が市政図書館として受けもち、市民が利用しやすい市役所の一階に開設されました。

ここでは、市民・職員・議員の誰かが情報を得られ、しかも議会図書館の役割も負っています。つまり、三者が同じ情報、同じ土壌の上で議論できるわけです。

従って、情報・資料提供の基本姿勢を、「利用者が選択に迷うほどの必要がありませぬ」と提供し、あとは利用者の判断にまかせることに、情報がかたよらないように心がけています。

資料は、す早く書架に出すことがポイントで、配置は、担当者がカウンターで市民や行政の需要を肌で感じながら、その時々々に広げて柔軟に行なっています。

分類や目録作成までは手がまわらない現状ですが、レファレンスサービスでカバーしています。担当者のあらゆる意味での力量

は、これらに限らず、カウンター業務での市民や行政職員との直接的な関わりの中で高められています。

四、社会教育における情報整理

青年の家等では今まで「情報」やその「公開」への関心が薄かったように思えます。

しかし、社会教育が、生活・地域に目を向ける市民の活動を援助しようとするならば、それらの情報とその公開に無関心ではいられません。

その際、これら情報整理や公開の努力は、「市民とともに」なされる必要があります。

「日野市図書館は、市民の必要にこたえてくれる」が敷かれ、市民の意見を反映して運営され、市民の利用により検証されてきた。つまり、図書館は市民によって育てられてきたのである。」と強調されていました。

（社会教育主事補・西村英東氏）

（二）と三については、砂川雄一氏と、市政図書館職員の方の証言を、筆者がまとめたもので、文責は筆者にあります。